

令和 6 年度第 2 回堺市総合教育会議 議事録

開 催 日 令和 6 年 11 月 6 日（水）
場 所 堺市役所 本館 3 階 大会議室 1・2
出 席 者 永藤 英機 市長 関 百合子 教育長
豊岡 敬 教育委員 新谷 奈津子 教育委員
長田 翼 教育委員 大内 秀之 教育委員
案 件 ・ 総合的な学力の育成
・ 特別支援教育の充実
・ GIGA スクールの推進

開会 午後 3 時 00 分

〈永藤市長〉

皆様、お忙しい中お集まりいただき、ありがとうございます。本日の総合教育会議は、教育委員に新たに豊岡委員、大内委員をお迎えして初めての会議となります。堺市では堺市教育大綱を策定しており、先行きが不透明な時代であっても、子どもたちが自ら未来を切り拓き、それぞれの幸せを実現することができるようにとの思いを込めて、基本理念を「未来を切り拓き、個々の幸せを実現する堺の教育」としています。

今回は、これまでの総合教育会議でも議論をしてきました「総合的な学力の育成」「特別支援教育の充実」そして「GIGA スクールの推進」について、現在の取組状況を確認し、今後より効果的に進めるために皆様と協議したいと思います。いずれも教育委員会において今年度まとめられました「子どもたちの未来のために～Change & Challenge～」の中で重点的に取り組む項目であり、これからの堺にとっても極めて重要です。

皆様と意見交換をさせていただき、市長部局としましても教育委員会と連携を密にしながら、次の時代の堺を担う子どもたちが健やかに成長し、自らの可能性を引き出すことができるように力を注ぎたいと思います。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

〈事務局〉

それでは本日の案件に入ります。一件めは、「総合的な学力の育成」です。教育委員会事務局から資料の説明をお願いします。

〈教育委員会事務局〉

「総合的な学力の育成」

資料 1 ページをご覧ください。「総合的な学力の育成」に向けた概念図です。本市では総合的な学力の育成に向けて「個別最適な学び・協働的な学びの一体的な充実、探究的な学びの充実」を進めています。

資料 2 ページから 6 ページをご覧ください。昨年度の総合教育会議での議論を踏まえ、総合的な学力の育成に向けて重点的に取り組む 6 項目を定めました。4 ページまではその具体的な取組内容を示しています。詳細は後ほどご説明します。5 ページから 6 ページは令和 6 年度前期・中期・後期、令和 7 年度の主な取組とスケジュールを示しています。

資料 7 ページから 8 ページをご覧ください。各項目の取組状況についてご説明します。まずは授業モデル「探究×ICT」を活用した授業改善です。近年の全国学力・学習状況調査の結果分析から、本市では「複数の情報を関連付けて考える問題の正答率の低さ」「無解答率の高さ」が課題となっています。その課題解決に向けて令和 5 年度末に新たな授業モデル「学びのコンパス」を作成し、学習指導要領に示された資質能力の育成への確に対応し、また子どもの学びに向かう力を育成する授業改善を進めています。令和 6 年度は教育センターでの研修や指導主事派遣を通して、8 ページに示している子どもの学び研究員（学びのインフルエンサー）の派遣等により、「学びのコンパス」に基づく授業実践を広く周知し、学校の伴走支援を図っています。

資料 9 ページから 10 ページをご覧ください。探究的な学びの充実に向けて、「学びのコンパス」に加え、令和 5 年度末に「堺 STEAM ブック」を作成しました。「堺 STEAM ブック」は総合的な学習の時間での取組に STEAM の視点を加味した事例集です。現在、市内での実践事例を収集し、研修等で各校での取組の共有を図っています。また、市内企業や団体等のリソースを活用した STEAM 教育の実現に向けて連携を模索しています。

資料 11 ページから 12 ページをご覧ください。読解力に係る取組です。令和 4 年度、5 年度にモデル 3 校で読解力を測る調査を実施し、教員や児童生徒のインタビューも含め、取組の検証・分析を行い、今年度はその結果や読解力を伸ばすポイントなどを整理し、学校園に周知しました。読解力を伸ばしている学校は、教員の働きかけにより児童生徒が自分に合った学び方を考え、自ら学び進めることができる傾向にあり、「学びのコンパス」との関連が見られることから、読解力の育成についても「学びのコンパス」による授業改善と関連付けて一体的に実施します。

資料 13 ページから 14 ページをご覧ください。IRT 調査を活用した取組について説明します。令和 3 年度からのモデル実施を経て、今年度より小学 4 年生から中学 2 年生まで、全校において CBT 方式で実施しました。調査の特性にありますように、経年での子どもたちそれ

ぞれの学力の変容を把握することで、より個に応じた支援を進めるものです。個人結果票では、子どもたちが自分に合った学び方を見つけられるよう学習に関するアドバイスを示し、また家庭学習の充実を図るために大切な事項を保護者向けに発信しています。また、14 ページのとおり、調査結果を学校が効果的に活用しやすいように分析・可視化した総合学力プロフィールを提供し、教育活動の改善や個々の子どもの支援の充実に繋がります。

資料 15 ページから 16 ページをご覧ください。集団の状況に着目した分析及び授業改善については、全国学力・学習状況調査や小学生すくすくウォッチで課題のあった調査問題の分析等を通じ、授業改善に繋げる取組を行っています。各学年でつまずき解消に繋がるポイントを示した「分析のしおり」を活用し、系統的に指導を繋げる授業を推進することや「総合的な学力向上に関わる研修会」等で具体的な調査問題を通じた授業改善の視点について学校園と共通理解を図っています。

資料 17 ページから 19 ページをご覧ください。教科等横断的な視点でのカリキュラム改善について示しています。各校における教育目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立て、その評価と改善を通じ、組織的・計画的に教育活動の質の向上を図ることが重要で、資料では好事例について示しています。17 ページは小学校において単元配列表を活用し、カリキュラム改善を図った実践例です。各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列する過程を示しています。18 ページは中学校において保健体育科で回転運動の学習をした上で、理科で運動とエネルギーについて学習する実践例です。このような教科等横断的な視点で実践を積み重ねることで、子どもの総合的な学力の高まりや教員の授業改善に繋がっています。19 ページは教育課程説明会の取組です。大学教員によるカリキュラム・マネジメントについての講演や各校の教育計画における PDCA の推進などの協議も行い、更なる取組の充実を図っています。なお、資料の最後には参考資料として全国学力・学習状況調査結果から見られる本市の学力の現状を示しています。説明は以上です。

〈事務局〉

ただいまの教育委員会事務局の説明を踏まえ、まずは教育委員の皆様からご意見を頂戴したいと思います。

(大内教育委員 挙手)

〈事務局〉

大内教育委員、よろしくお願いします。

〈大内教育委員〉

先ほど市長も仰った「未来を切り拓く子どもたち」を育成するために一番重要なのは失敗だと思います。色々なことにつまずき、挫折し、遠回りした時に手にする経験は、未来を切り拓くために必要な材料になると思います。資料は大変素晴らしいものですが、失敗やくじけそうになった時など、人と比べて自分が劣っていると思った瞬間にこそ、そこからまた立ち上がり、一步一步踏みしめるというエッセンスがあれば、総合的な学力の太い幹に変わると思います。

具体的な手段としては、遠回りしたり、くじけそうになったりした経験をした大人、例えば大病を患ったが、今では幸せに生きている人たちの経験をゲストティーチャーとして子どもたちに伝えてもらう。「失敗しても大丈夫なんだ」「くじけそうになっても自分の未来は切り拓けるんだ、明るいんだ」と思うことが、総合的な学力に繋がると思います。以上です。

〈事務局〉

ありがとうございます。他にご意見はありますでしょうか。

（豊岡教育委員 挙手）

〈事務局〉

豊岡教育委員、よろしくお願いします。

〈豊岡教育委員〉

大内委員から失敗が大切であるというご意見がありました。企業のマネジメントにおいても失敗を振り返って改善に結びつける取組がなされています。一般的にはPDCAのサイクルを回すと言われていますが、目標設定を行い、実行し、その成果を評価する。そして、反省して新たな改善策をとるサイクルがスパイラル状に向上すれば、より成果を生み出せる組織に成長します。堺市が進めている「学びのコンパス」も同様に、子どもたちがなぜ学ぶのか、どのように学ぶのかを考え、そして自分に合った学び方や学ぶ楽しさを見つけることによって成果が上がり、自分自身の成長を感じられるようになれば、更に学習意欲が高まります。

今、VUCAの時代と言われ、非常に不確実で不透明な時代ですが、強く生きていくためにはこのようなサイクルを回すことが非常に大切だと思います。このサイクルを側面からサポートできるのがSTEAM教育だと思います。科学・技術・ものづくり・アート・数学など、教科横断型で相互に分野が関連した実践的な学びにより、様々な方面への興味を伸ばすことに繋がると思います。STEAM教育の中では、地元企業の協力がキーになると思います。出

前授業や職場見学等は子どもたちにより広い世界を知るチャンスを与え、興味を持つ機会を与えます。現在、企業の産業観光への理解も広がっており、オープンファクトリーに対しても非常に積極的です。堺市においても、FactorISM（ファクトリズム）というイベントにおいて、企業が工場を一般開放し、地元の人たちとの関係構築に取り組んでいます。このような機運を大切に、地元企業と教育機関との連携が進むことを期待しています。以上です。

〈事務局〉

ありがとうございます。他にご意見はありますか。

（新谷教育委員 挙手）

〈事務局〉

新谷教育委員、よろしくお願いします。

〈新谷教育委員〉

私からは、読書の習慣を通して子どもたちの学力を底上げする取組に教育委員会としてより力を入れることを提案したいと思います。子どもの読む力が学力に与える影響については、既に多くの研究があります。特に子どもの頃からの読書量が大人になってからの意識、認知能力、非認知能力の高さと強い関係があることや、読解力の向上が国語だけでなく、他の教科の学習にも良い影響を与えることも示されています。最近では一般的に紙媒体の本を読まなくなっている一方で、デバイスを使った読書が増えてきているとの報告もあります。この流れに合わせて、現在、堺市子ども読書活動推進計画に基づいて、子どもたちの読書の機会を増やす施策が推進されていますが、学校の読書活動と連携して電子書籍を活用した新しい読書習慣を推進し、また促進することが重要だと考えています。

具体的には ICT を使ってそれぞれの子どもの興味や習熟度レベルに合わせた読み物にオンラインでアクセスできるようにすること、更に様々な多読ソフトを導入することにより、おすすめの本が出てきたり、読んだ内容に関するクイズなども含めた読書活動を提供したりすることが可能になります。学校側では朝にオンライン読書時間を設けて皆で一斉に読む時間を持つことや、読書量をオンラインでモニタリングして読書コンテストを行うなど、意欲を喚起するサポートができると思います。図書館の電子書籍は複数の人が同時に読むことができないなどの制限があるとお聞きしていますので、そのようなところから整備する必要があると思います。もちろん、電子書籍よりも紙で読む方が好きだという子もいれば、電子書籍の方が良いという子もいると思います。図書館と学校との連携を行うことで読書のパーソナライズを進め、子どもたちが 1 人 1 台パソコンを利用して積極的に読書に取り組み、長期的に学力の向上に繋げる必要があると思います。

〈事務局〉

ありがとうございます。他にご意見はありますでしょうか。教育長いかがでしょうか。

〈教育長〉

総合的な学力について、先ほど豊岡委員から VUCA の時代、予測困難な社会というお話がありました。そうした時代を生きる子どもたちに、総合的な学力の育成は何のためにするのか、それは自立した個人として、社会の形成者として、それぞれが自分の可能性を信じ、よりよく生きるための資質能力を培うことが基本となります。子どもたちにはどんな状況にあっても主体的に考え、広い視野を持って自ら判断し、他者と協力しながら己の人生を切り拓いていく、たくましい力を身につけてほしいと思います。

学習指導要領の考え方として、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実し、主体的・対話的で深い学びの実現をめざすと示されています。そのためには授業改善に繋げる取組が必要であり、また、当然ながら子どもたちの状況に合わせて ICT を最大限活用することが求められています。その上で、堺ではこれまで探究的な学びにおいて「学びのコンパス」「堺 STEAM ブック」「学びのインフルエンサー」「伴走支援チーム」など、様々な取組を行っています。

新谷委員から読書のお話がありました。学校や家庭学習での読解力はこれからの人生を生きていく上でも学校内外でも基本となります。そうした取組をどのように根付かせるか、生活リズムなど学校外での視点も大切になります。第 1 回総合教育会議の時にも申し上げましたが、早寝・早起き・朝ごはん等の生活リズムを整えることにより、物事に主体的に取り組む態度と学力の相関は以前より示されています。堺ではこれまで、例えば「家での 7 つのやくそく」を作り、ネットやスマホの時間を決めようという啓発や「みんないく（睡眠教育）」など様々な取組をしてきました。これらの取組は相乗効果を発揮するものですので、一体的に進める必要があることを、委員の皆様からのご意見を伺って改めて感じました。

さて、データに基づく教育行政が求められており、本日の資料でも各調査に関するデータ分析をお載せしていますが、データの分析から一歩先へ行く必要があると思います。各学校が置かれている状況は様々ですので、個別の事象に具体的にどのように働きかけていくのが課題となります。また、大内委員からお話のありました、失敗してよりたくましく幹が太くなること。子どもが社会に出てチャレンジする、イノベーションを起こすという意味でもそうしたことは関係があると思います。そのためにも社会全体で子どもの育ちを育み、支え、応援するという視点が大切になると考えています。

そもそも学校は社会の縮図ですので、学校・家庭・地域の連携、豊岡委員からお話がありました出前授業を含む企業との連携、そして本物に触れる文化芸術体験、またスポーツや自然体験など様々な体験を子どもたちが経験することは、ひいては、総合的な学力の育成にも結びつくと考えています。堺では読書活動はもちろんですが、堺科学教育フェスタには企業等に協力いただき、理科展の取組は夏休みの自由研究として子どもたちに根付いており、それらは堺の底力だと感じています。STEAM 人材、個別専門領域のみならず、分野を横断した学際領域の人材がこれから求められるのであれば、堺の持つ力を今後より活かすことができるのではと思います。

教育委員会としましても、学校現場の教職員の高い専門性と教育委員会事務局の指導主事の知見を活かして、子どもたちの学びの充実のため、多岐にわたる取組を一体的に進めていければと思います。私からは以上です。

〈事務局〉

ありがとうございます。市長いかがでしょうか。

〈永藤市長〉

まず資料の内容で確認をしたいと思います。資料5ページに「学ぶことを楽しみ、自ら学ぶ子どもの実現に向けたスケジュール」として、今年度の前期・中期・後期と令和7年度にまたがる内容が書いてあります。この中で特に「学びのコンパス」と「堺 STEAM ブック」に関しては、堺の教育の現状と課題を踏まえて取り組む新しい挑戦だと思います。この点について、今のところは順調だと認識しているのか、もし今の時点で課題等があれば答えてもらいたいと思います。いかがでしょうか。

〈教育委員会事務局〉

今年度は指導主事が学校に入り込み、浸透を図っており、意義や考え方は順調に周知されていると考えています。スケジュールにも「学校園と協働して公開授業・研究授業を実施し授業実践を周知」とお示ししています。授業モデルやカリキュラムについて、教育委員会事務局と学校園が協働して、より学校園が実践して良い取組を横に広げていけるようなモデルを作り、更に研究授業等の支援を行い、後期はより浸透を図ります。

〈永藤市長〉

新しい取組を行う時は、何のために行うのかという意義がきちんと理解されていないと、上辺の取組に終わりがねません。効果を発揮するためには、目的や意図などについて、すべての教職員が確実に理解しながら行えるように努めてもらいたいと思います。

先ほど豊岡委員からもサイクルを回すというお話がありました。今回、前期・中期・後期とありますが、それがきちんと浸透できていて、更に効果を発揮できているのかどうか。総合的な学力の向上が目に見えて現れることは短期間では難しいかもしれませんが、例えば教職員の感覚として「これは指導していて手応えを感じている」あるいは「これは子どもたちに伝わっていないのではないか」など定性的なものは確認できると思います。子どもたちが学校にいる期間は、大人たちの過ごす時間と比べて密度が濃く、短いものだと思います。ぜひ早いサイクルの中で、学校教育の間に子どもたちにフィードバックできるよう努めてもらいたいと思います。

また様々な教育課題において、学校長のマネジメントは欠かせませんが、この新しい取組や総合的な学力の向上においても、学校長が責任を持って行う必要があります。また教育委員会もそれぞれ学校長と連携を密にしながら、各学校できちんと進んでいるかを把握してもらいたいと思います。

その上で、委員の皆様からご意見いただいた内容についてです。失敗というキーワードについてのご意見をいただきましたが、やはり失敗を活かすことは人生の中で欠かすことができないエッセンスだと思います。その中で、特に基礎的な学力の部分で気になることは、そもそも答えない無解答の割合が堺の子どもは多いということです。それが毎年増えているようですので、自分の頭で考えてみようとしなない、挑戦をしなないところを懸念しています。まずは自分の考えを出してみてもらいたいと思います。それで間違えたとしても「もうそのままでいいや」と受け入れてしまわず「これではダメだ、悔しいけれど次に活かしたい」と思うことが必要だと思います。探究的な学びはそうしたことにも通ずると思います。まずは挑戦をしてみる。何か解答を導こうと努力をしてみる。失敗は活かすことができますが、そのためには気づきも必要です。ぜひ教育現場の中でも、改善に向かう意思がどうすれば伝わるかについて検討してもらいたいと思います。

豊岡委員が仰った地元企業との関わりも非常に重要だと思います。子どもたちが何のために勉強しているのかというところは伝わりにくいので、そのためにも、地元の企業や社会で活躍している皆さんのお話をお聞きしたり、オープンファクトリーなどで触れ合う機会を設けることで、勉強の目的や学習の意義を子どもたちに知ってもらえたらと思います。

読書の習慣については、先日、教育長と意見交換をしました。やはり読解力を身につけるために読書は重要ではないかと思っています。今、学力低下の原因の一つに、問題文の文章をきちんと読めていないことがあります。問題文が読めていないから正解にたどり着かない。数学や算数でも問題文の意味が分からなければ、そもそも国語の問題にもなってきます。そのため答えが分からず、無解答になってしまうこともあります。読解力を高めること、文章に触れておくこと、読書を習慣にすることは、総合的な学力の向上にも繋がると思います。教

育委員の皆様の間でも、堺市子ども読書活動推進計画の協議をしていただいていると思いますので、家庭での読書習慣を含めて、紙媒体、オンラインに関わらず、本を読むことに興味を持ってもらい、読書を通じて人生を豊かにしてもらえそうな取組ができればと思います。

総合的な学力は広範にわたるため、教育長が仰ったように様々な視点が必要だと思います。堺市においても、将来を見据えて「学びのコンパス」「堺 STEAM ブック」などの新しい取組に挑戦しています。ぜひ良い結果に繋がるように、効果が出ている取組とあまり効果が出ていない取組を常に把握してもらいたいと思います。そして効果が低い取組に多分の労力をかけているのであれば見直すなど、子どもたちの教育により効果的な手法を検討しながら進めてもらいたいと思います。以上です。

〈事務局〉

ありがとうございます。続いて、二つめの案件「特別支援教育の充実」について教育委員会事務局から資料の説明をお願いいたします。

〈教育委員会事務局〉

「特別支援教育の充実」

資料 1 ページをご覧ください。このグラフは、本市における特別な支援を要する子どもの数の推移です。令和 7 年度から令和 9 年度までは推計値となりますが、支援学級在籍者数、支援学校在籍者数、通級指導教室利用者数を予想しています。

資料 2 ページをご覧ください。重点的に取り組む項目として掲げている 3 項目の取組内容を示しています。重点的に取り組む項目は「それぞれの子どもの状況に応じた学びの場の見直し」「就学前から卒業後までの切れめのない支援や関係部署との連携強化」「教員の専門性の向上や ICT を活用した効果的な実践」です。表の右側には 3 つの項目それぞれにおける取組内容を示しています。

資料 3 ページをご覧ください。重点的に取り組む項目として掲げている 3 項目について、令和 6 年度前期・中期・後期、令和 7 年度の主な取組を示しています。

資料 4 ページをご覧ください。通級指導教室と支援学級の設置状況です。子どもの障害の状況や教育的ニーズ、またそれらの変化に応じた多様な「学びの場」を整理しています。現在、来年度に向けての通級指導教室の増設置に取り組んでいます。一方で、通級指導教室を担う教員の育成も必要と考えています。

資料 5 ページをご覧ください。切れめない支援に向けた中学校区の合同研修について、泉ヶ丘東中学校区の取組事例を紹介しています。幼児期から小学校、中学校の教育へと子どもに育まれた資質・能力をどのように共通理解し、学校園での指導に活かすかを考える取組です。子どもへの普遍的な関わりと各校種で必要な関わりや支援方法などが、各教員から意見として発表されました。2 学期以降はそれぞれの学校園で公開授業を行い、相互参観し、担任する子どもたちのより良い支援に繋がる指導について研究しています。

資料 6 ページをご覧ください。八田荘中学校区の取組事例です。問題行動のある子どもへの支援の充実を主軸に小中学校間で共通した支援や指導方法を探るために、研修を通して支援体制構築をめざした取組です。具体的な児童生徒の事例をもとに話し合うことで、どのような支援方法や指導方法が効果的であるかを考える場となり、次の日から子どもへの関わりに活かすことのできる意見が発表されました。それ以降も小中学校間で情報共有し、更なる連携を図っています。

資料 7 ページをご覧ください。登美丘中学校区の取組事例です。通級指導教室に関して、教員の理解促進と通級指導教室を利用する子どもの小中学校間の切れめない支援体制構築をめざした取組です。小中学校担当教員が連携した中学校進学後の実践事例を通して、効果的な通級による指導について共通理解を図っています。

資料 8 ページから 9 ページをご覧ください。通級指導教室について管理職を対象とした説明会を実施しました。教育委員会からの説明と設置校からの実践報告を行いました。設置校の実践報告では、校内体制についての具体的な内容や通級による指導の実践について、動画や写真も盛り込みながら報告を行いました。

資料 10 ページから 11 ページをご覧ください。学校生活において ICT を活用した教材、教具を積極的に利活用できる環境整備や場面の設定を進めています。10 ページでは、音楽の授業時、すべての子どもが自身の行動について振り返られるよう、児童生徒用パソコンで撮影した自身の演奏等を観て振り返り、皆で協力しながら本番に向けて合奏の練習に取り組む様子を紹介しています。ICT を活用することで、教員の指示を集中して聞いて理解することや行動の振り返りをするに課題のある子どもも一緒に学びを進めることができます。11 ページは、算数のかけ算の学習において、子どもたちが個々に習得したいと思う九九の段を選択し、主体的に学習を進められる教材例です。ICT 学習支援コンテンツを活用することで、計算の処理や書字、読字等に課題のある子どもも大きな負担なく、すべての子どもが授業時間や朝の時間等に気軽に取り組むことができます。説明は以上です。

〈事務局〉

それでは、ただいまの教育委員会事務局の説明を踏まえ、まずは教育委員の皆様からご意見がございましたらよろしくお願いいたします。

(長田教育委員 挙手)

〈事務局〉

長田教育委員、よろしくお願いします。

〈長田教育委員〉

私は保護者が安心して子どもを学校へ送り出せることが、子どもが学校で学んで社会へ羽ばたくための土台となる一番大切なことだと考えています。資料に示されている学校の取組が分かりやすく保護者へ伝わり、安心できる状況にしなければならないと考えています。

資料 2 ページの重点的に取り組む項目の 2 番めに「就学前から卒業後までの切れめのない支援や関係部署との連携強化」が示されていますが、保護者の視点で言えば、保護者が不安になるタイミングは就学前と小学校から中学校に進学する時だと思います。例えば、今までは園児として楽しく過ごせており、先生方のケアも行き届いていたが、小学校ではどうなるのかという不安があります。小学校から中学校に上がる時は、今度は学習が難しくなるのではないかと不安があります。保護者や子どもの困りごとに対して、先生方が学校園を越えて合同で研修を実施し連携していることは保護者にとって安心材料の一つになりますので、まだ取組が十分ではない校区があれば拡大してもらいたいです。またこうした取組について広報してもらいたいと思います。

重点的に取り組む項目の 3 番めに書かれていますが、管理職の先生方も含めて教員の皆さんが特別支援教育について学び続けていただいていることも保護者にとっては大変心強いことですので、こちらも継続してほしいと思います。保護者は学校との接点が多くないので、些細なことでも小さな疑問のうちに、身近な先生に相談・確認ができる環境であってほしいと思います。以上です。

〈事務局〉

ありがとうございます。他にご意見はありますか。

(新谷教育委員 挙手)

〈事務局〉

新谷教育委員、よろしくお願いします。

〈新谷教育委員〉

資料2 ページの重点項目3 の取組内容の最後にありますが、ICT を活用してユニバーサルデザインの実践を進めることについて、提案したいと思います。現在、児童生徒の障害や学習の困難さを補助するための ICT の活用については、全国でも多くの実践があり、堺市でも実践が進んでいます。今後は更に一步踏み込んで、異なる背景や能力を持つ子どもたちが共に学ぶ機会を提供することが必要だと思います。その中で、メタバースを使った活動が新たなユニバーサルデザインの実践として役に立つのではないかと考えています。アバターを介したコミュニケーションに否定的な意見や健康面への懸念がある点にも十分に配慮しつつ、授業全体をメタバースで行うのではなく、授業の一部にユニバーサルデザインの実践活動として取り入れるところから始めてはどうかと考えています。

例えば、歴史の授業で異なる時代のキャラクターを演じて、歴史的な出来事を再現することや、エジプトのピラミッドや NASA のスペースセンターをバーチャルフィールドトリップで訪れて世界中の情報を学ぶことも可能です。教育的なゲームを通して、アバターを使って協力しながら課題をクリアすることや、異なる地域や海外の生徒と交流することも考えられます。また、バーチャルクラスルームで生徒たちが様々なテーマについてディスカッションを行い、協力して解決策を考える機会を提供することもできます。実践報告では、対面のグループワークが苦手な子どもでもアバターを介した活動に積極的に参加ができたという報告もあります。また普段と違う自分のアバターを作り上げることで、物の見方が変わり、自分の殻を破るきっかけになったなどの報告もあります。

多様な子どもたちが共に学んで、そして成長できる環境を提供するために、様々な配慮をしながら後押しを行い、ICT を活用した新たなユニバーサルデザインの実践を模索することが重要です。以上です。

〈事務局〉

ありがとうございます。他にご意見はありますか。

(大内教育委員 挙手)

〈事務局〉

大内教育委員、よろしくお願いします。

〈大内教育委員〉

特別支援教育には多大なる思いがあります。私は生まれた時に腫瘍が二か所あり、その腫瘍を切除することで命と引き換えに両足の機能を失いました。0歳の時ですので、特別支援教育が必要な児童の大先輩になります。今、堺で特別支援教育を受けている子どもたちは、全員が自分の後輩だと言っても過言ではなく、そのような後輩たちのモデルになりたいと思います。最近は多様性という言葉が繰り返し聞かれますが、多様性を共に認め合うにはどうすればよいのか。まずは純粋にその空間と一緒にいることではないかと私は思います。

子どもたちは知らないことに興味があります。「なぜそのような目の色なのか」「なぜそのような肌の色なのか」「なぜ車椅子に乗っているのか」など子どもたちは興味がありますが、大人の空気を読んで車椅子に乗っていることを聞いてはいけないのではないかと考える。よくあることですが、これは大人の責任だと思います。肌の色が違っても、目の色が違っても、車椅子に乗っていたとしても、白杖を持っていたとしても、どんなに大病をしたとしても、同じ人であるということを直に体験することが必要だと思います。私たち大人が多様性についてもう一度しっかりと考えて、子どもたちに伝える必要があると思います。

一つだけエピソードをお話しさせていただくと、先日、能登半島の輪島市に行ってきました。10ヶ月前に誰もが知る震災が起きた場所でした。様々な人たちと一緒に車椅子バスケットボールの体験をしました。普段立っている人たちが競技用の車椅子に乗って一緒にバスケットをするというものでした。そこで5歳の子どもが2、3時間ずっと車椅子に乗って遊んでいましたが、最後に「大内さん大好きだ」と私に言ってくれて、私もその5歳の子どもに「僕も出会えてよかった、大好きだよ」と言いました。その瞬間、被災者や障害者、大人や子どもにカテゴライズされている壁は全部取り払われ、ただ楽しかった。ただ笑っている。それだけの空間で多様性の認め合いがすぐに実現できます。私たち大人が難しく考えることが重要なこともあります。子どもたちに一緒に遊ばせたり、一緒に学ばせたり、一緒に考えさせる。そういう環境が多様性を認め合う社会の実現に繋がると強く思います。ぜひ元特別支援教育の児童であった私をフル活用していただき、障害の有無に関係なく、未来を切り拓く子どもたちが笑顔になってもらえたらと思います。以上です。

〈事務局〉

ありがとうございます。他にご意見ありますでしょうか。教育長いかがでしょうか。

〈教育長〉

大内委員からとても心のこもったお話を頂戴しました。多様な子どもたちが共に認め合い、共に学び成長する環境は、安心安全と感じられるからこそ、失敗しても挑戦したいと思うエネルギーが生まれるなど、色々なことが繋がっていると気づかされました。これから共

生社会の一員として、共に認め合い、支え合うなかで、それぞれの持てる力、それぞれが存在しているだけで嬉しかったり、励みになったりすることが原点になると思います。

さて、資料1ページに戻りまして、少子化の中でも、特別な支援を要する子どもは増えています。通常学級や支援学級・支援学校、通級指導教室など様々な場面において、子どもたちに個別最適な学びや関わり方をするためには、学び続ける教職員がとても大事になってきます。長田委員からも先ほど保護者の不安にどのように寄り添うかという観点で、教職員の研修が重要というお話もあり、その通りだと思います。就学前の早期からの対応と幼小中高それぞれの学びの取組がありますが、人生百年時代とも言われる中で、卒業後の進路をどう考えるのか、社会への接続を見通した取組と視点が必須になるだろうと思います。そのためにはまず安心して子どもたちを送り出してもらう意味でも、学校と保護者の連携は大切ですし、ICTの活用も重要です。保護者の困りごとや子どもたちの気づきなどをきめ細かに見ていく必要があると考えています。

支援教育を進める上で必要な視点はいろいろありますが、三つ挙げるとすれば、ユニバーサルデザイン、多様性、合理的配慮となります。先ほど新谷委員からユニバーサルデザインについて多くのご指摘をいただきましたが、授業のユニバーサルデザイン化を考えたときに、どの子どもにとっても分かりやすいことが基本だと思います。例えば黒板の周り一つとっても、子どもが集中しやすく意識がそがれないような工夫や、子どもにとっての字の見え方や提示の仕方などです。ユニバーサルデザインは点字云々だけではない話です。先ほどメタバースの話もありましたが、今の技術革新の中でできることと、子どもたちの多様性をどのように活かすかが大事だと気づかせていただきました。皆様からのご意見を頂戴しながら、一緒に取組を前に進められたらと思います。以上です。

〈事務局〉

ありがとうございます。市長いかがでしょうか。

〈永藤市長〉

特別支援教育については、市長就任以来、なんとか現状の課題を改善したい、また充実させたいという思いで、教育委員会や事務局の皆さんとも議論をして、総合教育会議の場でも何度も議題として取り上げ協議をしています。その内容も踏まえた上で今日の資料を作成していただいていますので、この内容が効果的に、また適切に進むように力を注いでもらいたいと思います。その中で、ぜひ更に強化してもらいたいところが二点ありますのでお伝えします。

一つは、先ほど長田委員からもお話がありました、就学前からの切れめのない支援、連携強化です。特に就学時や進学時は保護者の皆さんは大変悩みます。悩んで決断をします。私も大阪府議会議員の時に何度もそういうご相談を受けてきましたが、支援学校が良いのか、地域の小学校が良いのか、そして決断をされる。その時に教育委員会としてもう一度考えていただきたいのは、本当にその子どものため、保護者のために、きちんと話を聞きながら、また客観的な視点を取り入れながら、その子どもにとってベストの選択肢であるか、そのためにきちんと相談に乗れているか、もう一度内省してもらいたいと思います。教育センターと学校は内部的には違う組織ですが、保護者の方からすれば、同じ堺市教育委員会の中の組織です。自分たちの意見が届いていないのではないか、思いが伝わっていないのではないかなど、不安にならないよう対応してほしいと思います。また、第三者の方に相談できるところがあれば、よりその子どもにとって、もしくは安心して保護者の方が送り出せる環境にも繋がると思います。これは障害のある子どもだけではなくて、医療的ケア児の方にもおそらく同じようなことが言えると思います。ぜひ人生の大きな決断である就学・進学に寄り添い、最善を尽くした対応ができるように、教育委員会としても切れめのない支援に今以上に力を注いでもらいたいと思います。

次に、教員の専門性の向上についてですが、特別支援教育について専門性を高めること、管理職を対象とする研修はもちろん大事ですので、より取り組んでももらいたいと思います。一方で今、教育委員会としてはすべての小中学校において、通級指導教室を利用できるようにする方向性だと思います。今後更に理解を深め、適切に対応することができ、子どもも保護者の方も不安を感じない環境にすることが重要だと思います。すべての教職員が理解して寄り添った対応ができるように、ぜひ早急に進めてもらいたいと思います。子どもたちの時間は刻一刻と過ぎていきます。普段学校で過ごす何気ない時間であっても、接した教職員の理解が足りなかったり、対応が良くなかったりすると、それが一生の傷になってしまいますので、すべての教職員が理解していることをめざしてもらいたいと思います。

その上で、先ほど大内委員からもご意見いただきましたが、多様性を認め合い、障害のある子どもが安心して過ごせる環境であるためには、同じ時間、同じ場所を共有することが非常に重要だと思います。ご提案いただいたメタバースなどの取組が今はありますので、1人1台パソコンが整備されている今だからこそ、何か同じ空間を共有できるような取組ができると思います。知らなければずっと遠い存在のままですが、知れば思っていたよりも身近で、あの壁は何だったのかということもあると思います。インクルーシブ教育という言葉だけでまとめられないかもしれませんが、この堺市において共に過ごすような時間を持てたらと思います。

堺市は歴史ある都市ですが、これまでも多様性を受け入れて発展してきました。海外から新しい文化などを取り入れながら、独特の発展を遂げてきたと思いますので、ぜひ特別支援教育においても先進的な取組に挑戦してもらいたいと思います。やはり、めざすところは大内委員が仰った障害の有無にかかわらず、子どもたちが笑顔で過ごすことができるというところだと思います。障害の有無に関わらず、安心して充実した日々を子どもたちが過ごすことができる環境を整備することが極めて重要です。ぜひ大きな目標を掲げながら、積極的に取組の強化を図ってもらいたいと思います。以上です。

〈事務局〉

ありがとうございます。続いて、三つめの案件「GIGA スクールの推進」について教育委員会事務局から資料の説明をお願いいたします。

〈教育委員会事務局〉

「GIGA スクールの推進」

資料 1 ページをご覧ください。重点的に取り組む項目として掲げている 3 項目と具体的な取組内容を示しています。第 1 は「ICT を活用した個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実、探究的な学びの充実」です。第 2 の「ICT を活用した多様な子どもへの対応」については、第 1 回総合教育会議における「不登校の子どもへのサポート」及び先ほどの「特別支援教育の充実」においてご報告のとおりです。第 3 は「ICT を活用した教職員が働きやすく働きがいのある学校の実現」です。

資料 2 ページをご覧ください。重点的に取り組む 3 項目について、主な取組とそのスケジュールを示しています。以降のページにおいて、それぞれの取組の内容についてご説明します。

資料 3 ページをご覧ください。ICT 活用推進研究員による授業支援です。昨年度に引き続き、ICT 活用推進研究員、いわゆるインフルエンサーの教員を学校に派遣し、授業におけるサポートや ICT 活用に関する相談対応など各学校の課題に応じた支援を行っています。今年度は、総合的な学力の育成の案件の際に説明しました「学びのコンパス」である授業モデル「探究×ICT」を活用した授業改善の取組と連携し、学びのインフルエンサーとも協力しながら学校への支援に取り組んでいます。

資料 4 ページをご覧ください。授業での ICT 活用の内容の充実に向けた取組です。今年度から進めている授業改善のための資料「学びのコンパス」を参考に、子どもたちが自ら学びを進めるための ICT 活用を実践しています。学びの場面で教員や子どもたちが児童生徒用パソコンを効果的に活用するための考え方を示し、授業での実践を進めています。

資料 5 ページをご覧ください。指導や校務における活用事例の共有です。昨年度に引き続き、各学年・教科の指導や校務における ICT 活用事例約 200 件を教育情報ネットワークのサイトに掲載し、教員間で共有して学校での実践に繋げる取組を進めています。

資料 6 ページをご覧ください。現在、文部科学省リーディング DX スクール事業の指定校において、ICT を活用した授業等の実践事例の創出に取り組んでおり、今年度末には、その成果を全国や市内の学校に発信・共有する予定です。また、子どもたちの情報活用能力の育成を図るための教員研修も昨年度に引き続き実施しています。

資料 7 ページから 8 ページをご覧ください。今年 9 月から全市立中学校にデジタル採点支援システムを導入し、採点結果の自動集計や選択式問題・数式等の解答について自動採点機能などの活用を順次開始しています。8 ページに記載のとおり、昨年度システムを試験導入した学校では採点時間が約 45%削減されたとの調査結果があり、採点の効率化と事務負担の軽減をめざしています。

資料 9 ページから 10 ページをご覧ください。今年度、学校園における教職員の生成 AI 活用ガイドラインを策定し、授業や校務での生成 AI の活用を進めています。10 ページに校務における活用例を示しています。今後は学校現場やリーディング DX スクール事業の生成 AI パイロット校での活用事例を市内の学校へ発信・共有し、また文部科学省のガイドライン改訂の動きも踏まえて、教員研修への反映を行います。

資料 11 ページをご覧ください。児童生徒・教職員へのアンケート等により、端末やネットワークに関する様々な課題を把握しています。令和 7 年度の児童生徒用パソコン及びネットワーク機器の更新において、これらの課題に対応すべく検討を進めます。説明は以上です。

〈事務局〉

ただいまの教育委員会事務局の説明を踏まえ、まずは教育委員の皆様からご意見を頂戴したいと思います。

(豊岡教育委員 挙手)

〈事務局〉

豊岡教育委員、よろしくお願いします。

〈豊岡教育委員〉

テクノロジーの進歩によって我々の働き方や暮らし方が非常に変わってきており、当然、教育のあり方も変わらなければならないと考えます。産業界において ICT で生産性を高めているのと同様に、教育においても今までできなかったことを可能にする時代ではないかと思います。GIGA スクールの推進によって、従来とは違う不登校の子どもへのサポートや特別支援教育の充実、また ICT を活用した教職員の働き方改革などにおいて、非常に効果があると思います。私は特に GIGA スクールの最初の G に関心を持っています。これはグローバルの G ですが、市長が仰るようにもともと堺は国際貿易都市であり、世界と繋がる都市であるという認識を持っています。ICT が発達することによって、世界と繋がる教育ができるのではないかと思います。

新型コロナウイルスのパンデミックにより、大変な状況が世界的に続いていましたが、その中でアメリカに留学していた高校生が日本への帰国を余儀なくされました。その時にアメリカの学校が彼に対して、オンラインでアメリカの授業に参加したらどうかと言ってくれたようですが、時差の問題があり、深夜にインターネットを繋いでアメリカの授業を受ける必要がありました。10 代の若者にとっては非常にハードルが高く、彼は断念することになりましたが、ICT を使うことで外国の学校の授業に参加できる可能性が広がっています。海外との結びつきや授業の改革など新たな可能性が生まれていると感じています。

今は AI を活用することによって自動翻訳機能も非常に発達しており、言葉の壁もなくコミュニケーションが取れる世界が実現できるようですので、ぜひ ICT を使って世界と繋がる堺市の教育を様々な形で検討していただけたらと思います。以上です。

〈事務局〉

ありがとうございます。他にご意見はありますか。

(新谷教育委員 挙手)

〈事務局〉

新谷教育委員、よろしくお願いします。

〈新谷教育委員〉

先ほどの総合的な学力の育成の議題では、読書活動促進のために図書館と学校を ICT で繋ぐこと、特別支援教育ではメタバースを使って児童・生徒同士を ICT で繋ぐことと、いずれも ICT 関連のご提案をさせていただきましたが、ここでは、授業での学びと家庭学習、自主学習を ICT で繋ぐというご提案をしたいと思います。1 人 1 台端末を導入してから、多く

の先生方がデジタル端末を使った様々な授業実践を試み、それが共有されていますが、素晴らしいことだと思います。例えば、大阪府教育委員会のホームページでも、授業実践例が豊富に公開されており、授業で即活用できるような具体的な授業の提案がされています。

これからは、そこから更に踏み込んで、授業内で端末を使うだけではなく、モバイル端末の強みである家庭学習や授業外学習に力を入れていくことが重要だと考えています。例えば授業を受けて終わりではなく、家庭学習の中で授業内容の振り返りを端末で行い、学校での学びをより深める機会をつくるなど、児童・生徒同士が授業外で協働する場を提供する必要もあります。

更に踏み込んで、子どもたちが家で自ら計画を立てて勉強することを、端末を使って支援することも今後、必要ではないかと思います。ICTを活用して家庭での自主学習のプランニングをする。また学習マネジメント能力の育成を図ることも考えられます。例えば家庭学習の時間や計画達成を集計して、学校では自主学習コンクールなどを行うなどにより、家庭学習のモニタリングや支援が可能です。このように1人1台端末のメリットを最大限に活かし、授業外でICTを使用した学びを推進し、家庭学習の時間と質の向上を通じて、子どもたちの学力や学習意欲を更に伸ばしていけるのではないかと考えます。以上です。

〈事務局〉

ありがとうございます。他にご意見はありますか。

（長田教育委員 挙手）

〈事務局〉

長田教育委員、よろしくお願いします。

〈長田教育委員〉

先ほど豊岡委員から、GIGA スクールの推進により ICT で今までできなかったことを可能にして生産性を上げるというお話がありましたが、教育の現場にも ICT 活用を進めることで時間にも気持ちにも余白を生み出し、その余白の分で実際に子どもに向き合ったり、教員の学びの時間を確保することに使ってほしいと考えています。

重点的に取り組む項目の一つめで、ICTを活用して、更に深い学び、探求的な学び、堺のめざす学びへと発展させる段階に来ていると思います。生徒に1人1台パソコンが配備されてから4年目になります。最初の頃はとにかく触ってみよう、試してみよう、慣れてみようという段階でしたが、早くもこのような発展段階に来ています。保護者として小学生の子

どもたちを学校に見に行くことがあります。今では休み時間になれば、パソコンを開けてブライントタッチの速さと正確さを競うゲームをしたり、自分たちがプログラミングで作ったゲームを交換したりする姿が見られます。子どもたちは慣れれば早いことにとっても感心しています。そして、重点的に取り組む項目の三つめに、ICTを活用して教職員が働きやすくとありますが、子どもたちの学びの側だけでなく、教職員が校務で活用することで、学校同士、教職員同士がネットワークで繋がり、相互の良い活動の情報共有が可能になるので、良い事例は今後すぐに広がっていくことを期待しています。

ここから先は次のステップになりますが、先ほど新谷委員から授業での学びと家庭学習をICTで繋ぐ話があり、私もそうしてほしいと思います。先ほどは生徒と先生、先生同士、学校同士の繋がりでしたが、今後は学校と保護者のICTの繋がり方も見直していけたらと思います。連絡ツールアプリは既に導入されていますが、欠席連絡や学級だよりなど一方通行的な事務連絡にだけしか使われていないと思います。例えば「4年生は今月天体の学習をしました。今夜はお月様が見えると思うので、おうちの人と観察してみましょう」とか「6年生は主権者教育を学習します。日曜日はぜひお子さんと一緒に投票所に足を運んでみましょう」など、保護者を巻き込んだタイムリーな家庭学習の呼びかけにICTツールを活用してはいかがでしょうか。授業の内容と実社会の体験を関連付けるような活動を推進できるのではないかと思います。総合的な学力の育成でも、家庭学習を支援する必要があるとのことですので、そのあたりと絡めて今後考えていけるのではないかと思います。以上です。

〈事務局〉

ありがとうございます。教育長いかがでしょうか。

〈教育長〉

先ほど豊岡委員からICTでグローバルに世界と繋がる教育を実現できるというお話がありました。ポストコロナであり、1人1台端末だからこそできる取組として、オンライン英会話があります。先日、中学校のオンライン英会話の授業を視察しましたが、1人1台端末でイヤホンを装着して、子どもたちが周りの状況を気にせず、臆せずに発言や会話できていました。段階も生徒それぞれですが、一学期に1回、二学期に1回と実施しており、堺に居ながらにして授業で海外と繋がる体験を10代のうちにできることは1人1台端末の強みだと実感しています。

また、新谷委員から読書のお話がありましたが、学力と読解力については本当に深い関係があります。学校司書の取組や市立図書館の子ども読書活動推進計画の取組に言及いただきましたが、そこでも1人1台端末だからこそできる活動があります。今のデジタルネイティブの子どもたちにとって、電子書籍は一つのきっかけになるのではないかと思います。

電子書籍はどこからでも、学校に居ながらでも、家庭学習の中でも読書ができます。今の時代に合わせた、読書の間口を広げる一つのアクセスの仕方だと思います。

先ほど市長からお話がありましたが、個人的には私は挿絵や装丁の美しさなど、紙の本を手にとって見るのが好みではありますし、いずれは子どもたちにも図書館で、多くの本の森の中で、自分の興味関心以外の本に出会う喜びを体験してほしいと思いますが、そこに誘うためにも、電子書籍は本に触れるとても良い一つのきっかけになると考えています。1人1台端末があるからこそ、そういう機会を子どもへ提供できます。市の図書館と学校の図書室、学校司書が非常に頑張って取り組んでいます。来年度、細々ですが研究指定などをしながら、1人1台端末による仮想空間と実社会を繋げる取組を進めたいと思います。

先ほど長田委員からプログラミング学習一つとっても子どもたちは慣れるのが早いというお話がありました。当然、教職員の研修も合わせて行う必要があります。また、新谷委員からお話がありました通り、大阪府において家庭学習との連携に関する好事例があるのであれば、1人1台端末だからこそ情報共有は早くできるでしょうし、家庭学習の提案や授業実践例の横展開は一体的に考える必要があると思います。

併せて ICT や 1人1台端末は基盤となるものであり、今後、学校群を全市に展開する際には、とても親和性が高いと思います。皆様の色々なご意見をいただきながら、この1人1台端末と学校群における取組、そしてグローバルに繋がる取組も含めて教育の幅を広げていければと考えています。以上です。

〈事務局〉

ありがとうございます。市長いかがでしょうか。

〈永藤市長〉

先日、リーディング DX スクールと生成 AI パイロット校に指定されている堺市立の小学校と中学校を見学しました。子どもたちは慣れていて、もう当たり前のように1人1台パソコンを使いこなしていましたが、逆に教員の方が対応できていないように感じました。子どもたちの関心事項が多い中で、教員は一人ですので、対応するためにはもう少し慣れが必要ではないかという印象を受けました。一点、事務局に確認したいのですが、リーディング DX スクールや生成 AI パイロット校などの特別な学校に指定されていない学校の中で、活用できている学校と活用できていない学校の格差が広がっているのではないかという懸念がありますが、そのあたりはどのように認識していますか。

〈教育委員会事務局〉

毎日使っている学校と週 1 回以上は使っている学校が大半です。市長ご指摘のように、格差が拡大とまでは言い難いですが、毎日使っている学校と週 1 回ぐらいの学校では少し活用率に差があるのではないかと思います。また、使い方の問題もありますので、事務局において活用事例を横に広げるなどの支援を行っています。

〈永藤市長〉

この総合教育会議でも、まずはすべての教員が一度は使ってみることを目標に掲げ、達成できましたが、それはスタートラインです。そこからどう使っていくかが大切ですので、実際にきちんと活用されているのかどうか、「一回触ったから、いいや」で終わらないように徹底してもらいたいと思います。

子どもたちの学びにとってはもちろん重要ですし、教職員の働き方改革にも効果があると思います。資料 8 ページに、デジタル採点支援システムの導入成果が出ており、令和 5 年度に中学校 3 校へ試験導入した結果、採点時間が 53 分削減したとあります。こうした取組は非常に効果的だと思いますが、この削減した時間をどのように使ったのか、もう少し分析してもらいたいと思います。働き方を見直すことで子どもたちに向き合う時間が増えたのか、もしくは時間外勤務が多かったのでワークライフバランスの実現に繋がったのか、そういう前向きな回答があれば、実際に使ってみようという意欲に繋がると思います。「AI を使うべきだ」や「ICT を活用しなさい」と言うだけではなかなか人の行動は変わりませんので、「こうすればより効果があります」「あなた自身の働き方にも良い影響があります」などのメリットを示すことができれば、行動変容に繋がるのではないかと思います。「まずは使ってみる」から「どう活用できるか」「どう活かすか」というステージに移ってきていますので、今日委員の皆様からいただいた貴重なご意見も活かしながら、教育委員会としてぜひ前向きな取組を実践してもらいたいと思います。

豊岡委員からお話いただいたグローバルについてですが、堺市のこれまでの歴史を活かしながら、今、世界と繋がることを意識して取組を進めています。昨年の G7 大阪・堺貿易大臣会合の際にも、G7 の各国領事や総領事に各小中学校で講演や授業をしてもらう機会を設けました。来年開催の大阪・関西万博に関しても同じような取組を行っています。訪問した生成 AI パイロット校では、アフリカの地理について 1 人 1 台パソコンを使って調べていました。これまでは教科書に載っていなければ学べなかったことを、子どもたちがインターネットという世界の中で自ら調べることはとても意義深いと思います。世界との距離が一気に縮まったと感じます。堺市としても、ぜひこういった国際化や国際理解の取組を進めたいと思います。学校でも子どもたちが 1 人 1 台パソコンを活用して海外のことを学ぶことで、将来、海外で活躍する子どもたちもいると思いますし、海外のことを知りながら日本を

舞台に活躍する子どもも多くいると思います。子どもたちの可能性を伸ばすという意味でも、色々な選択肢を提供してあげてほしいと思います。

そして、授業外の学習への活用については、最初の「総合的な学力の育成」の参考資料 5 ページに、学校の授業時間以外の 1 日当たりの学習時間が示されていますが、全国と比べて堺市では「全くしない」という子どもが多い状況です。1 人 1 台パソコンだからこそ、授業外での振り返りなど、これまでできていなかったことが進むと思いますので、ぜひ授業外の学習に効果的に活用してもらいたいと思います。併せて、長田委員からご指摘もありましたが、連絡ツールだけでなく、授業で学んだことを何か行動に繋げるなど、実社会で活かせることもあると思います。1 人 1 台パソコンは授業時間だけではなく、持ち帰りもできることも踏まえて活用してもらいたいと思います。

最初に申し上げましたが、これからどう活用していくのかが大きな課題であり、GIGA スクールで導入した 1 人 1 台パソコンをどう活かすのか、堺市だけではなく全国の自治体が活用を模索している状況だと思います。堺市でも 1 人 1 台パソコンが導入されて、すべての教員が一度は使ってみたという状況です。「ものの始まりなんでも堺」ですので、ICT の活用についても新しいチャレンジを積極的に行っていただきたいと思います。この総合教育会議の場でも、ぜひ堺市で先駆けて行う取組が出てくることを期待しています。以上です。

〈事務局〉

ありがとうございました。本日予定していた案件は以上となります。各委員におかれましては、ご多忙の中、ご出席いただきありがとうございました。また、各案件に対して貴重なご意見やご提案をいただきまして、重ねてお礼申し上げます。次回の総合教育会議は 2 月を予定しています。開催日時や案件につきましては改めてご案内します。本日の会議は以上で終了とします。ありがとうございました。

閉会 午後 4 時 30 分頃